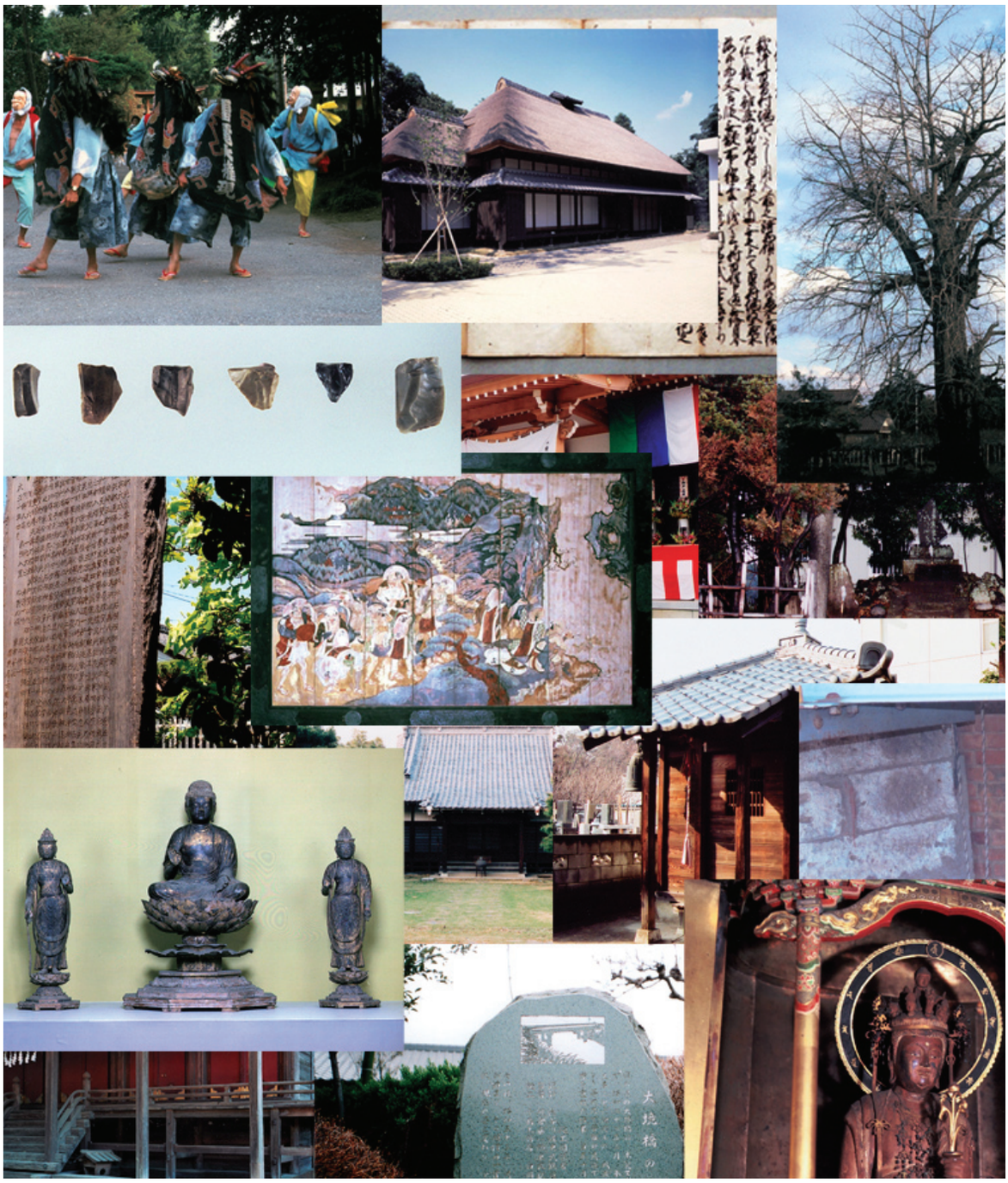
宮代再発見

写真でめぐる文化財展



企画展開催にあたって

木々の芽もふくらみ、さわやかな風とともに戸外を歩くことが非常に心地よい季節になってまいりました。歩くことはそのものの楽しみだけでなく、新たな出会いや発見の機会を与えてくれます。そして、何かを目的に歩く場合の道しるべの一つとして、テーマに沿った情報や地図を希望される方々からの相談や要望が、本館に寄せられることも増えてまいりました。

今回の企画展は「宮代再発見　写真でめぐる文化財展」と題し、私たちの身のまわりにある文化財を地図と写真を中心に紹介いたします。この展示で示す文化財は、単に県や町から文化財として指定されているモノのみをさすのではなく、宮代町の歩みを見つめてきた歴史の証言者として私たちに多くの情報を与えてくれる、そのようなモノ全てをさしています。

展示はいくつかのテーマに分かれ、それぞれ地図を作成してあります。この展示をご覧になった後、実際に地図を参考に歩いていただくことにより新たな郷土宮代を発見され、より一層の理解と愛着を深めていただければ幸いです。

平成17年3月　宮代町郷土資料館

凡　例

① 本書は平成十七年三月十九日から同年七月十日まで開催される「宮代再発見　写真でめぐる文化財展」の展示図録です。

② 本展示の写真撮影は当館学芸員が、企画構成並びに本書の執筆は横内美穂が行い、編集は長谷川弘樹が行いました。また、展示は資料館職員が協力し行いました。

宮代再発見

写真でめぐる文化財展 概要

国・県・町指定文化財を訪ねる（地図1）

宮代町には、平成17年3月現在で、国指定重要文化財が1件、県指定有形文化財が1件、そして町指定文化財が無形（1件）・有形（13件）合わせて14件あります。

国指定文化財は西光院阿弥陀三尊像で、現在は上野にある東京国立博物館に保存されています。

県指定文化財は、東地区にある五社神社本殿で「五間流れ造り」と呼ばれる地方色豊かな建物です。すぐ近くに西光院もあります。かつては、西光院阿弥陀三尊像が納められていた阿弥陀堂と五社神社は並んで建てられていました。

町指定文化財のうち、無形文化財の「東条原獅子舞」は、江戸時代中頃にはじめられたとされるもので、現在では7月16日近くの日曜日に東条原の鷲宮神社に奉納されています。また、中地区にある天然記念物に指定されている宝生院の大イチョウは、樹齢五百年以上も経っている大木です。その大きさには圧倒されます。

道標～みちしるべ～を求めて（地図2）

道しるべとは、石にその道の行く先を示した道案内を示します。町域にある道しるべは、享保17年（一七三二）から明治8年（一八七五）にわたる24基が確認されています。道しるべには行き先だけでなく距離なども示されていますが、当時の人々の地理感覚や距離感覚、また行動範囲などもうかがうことができます。ほとんどが古くから道として往来してきた場所にあることから、道しるべを訪ねて歩くことは古い道を訪ねることができるといえます。

また町域の道しるべの特徴として、道しるべとしての目的だけで造られたというよりは、当時の人々が信仰心の顕れとして造立された庚申塔や地蔵像、観音像などに道しるべとしての情報が刻まれているものがほとんどであることもあげられます。

町内の寺院・堂庵を訪ねる（地図3）

これまでの調査により、町内には西光院を始め、古くから数多くの寺や堂庵があることが明らかになっています。跡地を含めると相当の数の寺院、堂庵があったことが知られています。

町指定文化財である十一面観音菩薩立像のある和戸本郷の西方院は真言宗智山派の寺で、寺伝によると寛仁元年（一〇一七）に創立されたと伝わります。現在の町域で確認されている道しるべの中で最古の年号である、享保17年（一七三二）の道しるべがあります。

西条原の宝光寺は天文元年（一五三二）創立とされる曹洞宗の寺で、「ぶっさり地蔵」という昔ばなしが伝えられています。

須賀の真蔵院は嘉暦年中（一三二六～一三二九）創立とされる真言宗智山派の寺で、「身代り薬師」の伝説があります。また、中世には門前に市がたったとされ、「市場之祭文（武州文書）」に示された「須賀の市」は、真蔵院の門前市であったと考えられています。

前原の宝生院は真言宗智山派の寺で15世紀後半の開基であると伝えられ、町指定文化財の天然記念物である大イチョウがあります。

町内の神社を訪ねる（地図4）

日本には八百万の神がいる…とよくいわれます。人々は暮らしの中のさまざまな場面において、その場面ごとに願いをかなえてくれる神が存在すると考え、それぞれの神々への信仰を深めてきました。農耕に関する神や疫病などから守ってくれる神、また学問を深めたり商売が繁盛したりするように守り導いてくれる神など、人の願いの数だけ神が存在していると言えるかもしれません。これらの神々は、社を建てて祀られたり、あるいは石造物が造られたりなどして、人々から信仰されてきました。

明治時代以降の歴史の中で、いくつかの神社が合祀さ

れたり、個人の宅地内にひっそりと祀られていたりするために正確な数は把握できていませんが、町域にはまだ数多くの神社が点在しています。

近代の宮代を訪ねる（地図5）

町が発展してきた歴史の中に「なぜ」を求めると、その理由の一つとしてさまざまな開発の成果が挙げられます。江戸時代の笠原沼の新田開発も含め、米づくりを目的とした用水などの整備や土地改良などがおこなわれ、成果をあげてきました。また、災害に対する反省と備えの観点からの治水もおこなわれました。

さらに明治32年の東武鉄道の開通は、人や物資の流れをそれまでの牛馬や舟などから鉄道という運送方法へと大きく変えるとともに、人々の生活様式そのものにも大きな変化を与えることになりました。

このように、郷土に暮らした先人達の力によりさまざまな開発がおこなわれてきましたが、その詳細を知ることは今となっては難しく、これらの多くは残された記念碑や構造物などから断片的にうかがい知ることが出来ます。

郷土の先人を訪ねる（地図5）

郷土に生を受けた先人の事跡を紹介した記念碑（顕彰碑）をご紹介します。町域にある記念碑をみると、多くは郷土の発展や教育に深くかかわった方ですが、中には郷土という枠を越え、日本という国の発展において大きな功績を上げた方のものもあるようです。個々の詳しい調査成果については今後の展示に期待いただくとしても、まずは先人達の事跡を訪ねてみてはいかがでしょうか。

文化財案内板について（地図6）

宮代町には「全町博物館構想事業」という事業があります。町全体を博物館と想定し、町内に散在する文化財・史跡・祭事などについて、それらの名称・由来などを記した案内板・標柱を設置したり、見学コースを設定するなどを行う事業です。毎年少しずつ増やしているところですが、将来的には文化財マップなどを作成したりして、文化財ネットワークを構築することを目標にしています。現在、平成16年度分の設置も含めて、案内板21基、標柱5基を設置、また従前の案内板を含めると34基の案内板・標柱が設置されています。

姫宮落川に架かる 煉瓦造りの橋脚

宮代むかしむかし

十一面観音（西方院）

地図
1-③
3-1
6-3

西方院の観音堂は蓮台山流水寺と称します。ここの本尊の十一面観音は、行基の作といわれています。この観音は、大洪水の際、古利根川を流れてきたのを拾いあげて西方院に奉祀したものだそうです。

ぶっさり地蔵（宝光寺）

地図
3-3
6-10

西条原の宝光寺にある地蔵尊をぶっさり地蔵といいます。昔、近郷近在の若者が杉戸宿に遊びに行った頃の話です。夜道を歩いての帰り道、宝光寺の近くまで来たときに肩に若い娘がおぶさってきました。暗くて顔も見えなかったのでそのまま背負って歩き、我が家も近づいてきたのでどんな娘かと思い振り向いて見てみると、娘ではなく地蔵尊がおぶさっていました。あわてて問いただしてみると、宝光寺の地蔵尊だと答えたそうです。

身代り薬師（真蔵院）

地図
3-3
6-10

須賀の真蔵院には、身代り薬師というものが祀られています。その縁起によると、昔、伊藤修理大夫光重という者が無実の罪のために北条時氏の軍勢に討たれました。光重の首をもったその軍勢が須賀の地にさしかかると、にわかに光重の首が重くなりました。不思議に思い確かめると、光重の首ではなく薬師の首にかわっていました。伊藤の家に尋ねると、光重は傷一つ受けていませんでした。薬師の霊験に感じ入った時氏は、ただちに光重の罪を許しました。それとともに、この霊験のある薬師を鎌倉に迎え入れようとしましたがどうしても重く動かすことができませんでした。

しかし、ある夜、須賀の領主の形辺左衛門尉が夢のお告げを受けて薬師のお堂を造ったところ、綿のように軽く持ち上げることができ、その首を移すことができたそうです。

左甚五郎と鍛冶屋（西光院）

地図
1-国1
1-④⑤
3-11
6-⑦

むかし、不思議な大工が西光院に現れて、御堂を三日間で建てることを本尊に誓いました。仕事は着々と進み、三日目の明け方ころにはできあがるまでになりました。すると東の空が白むとともに、村の鍛冶屋の「トンテンカン、トンテンカン」という勇ましい槌の音が響いてきたので、大工は残念そうに工事をそのままにしてどこへともなく立ち去ったという。

その後、鍛冶屋の家に不幸が続いたので、村の人たちは大工さんのたたりだろうと言ってうわさし、おそれました。それからというもの、この村にはまったく鍛冶屋が住みつかなくなったそうです。なお、お堂を建てかけたまま村を立ち去ったこの大工は、左甚五郎であったということです。

勝軍地蔵尊（地蔵院）

地図
1-④
3-11
6-⑦

西原の地蔵院は勝軍地蔵尊を祀っています。この地蔵尊は馬にまたがっていて、火伏せの神様として信仰されています。あるとき、耕地内の民家が火事になったときに、白い馬が駆けめぐり火を消しました。このとき勝軍地蔵尊も白馬にまたがり、よく見ると赤い汗をかいていたということです。

身代神社

地図
4-14

むかしある武将が奥州に落ちのびようとしたときのこと。今の身代神社の辺りまで逃げてきましたが、もうすぐそこまで追っ手が身近に迫っており、武将の娘である姫が捕らえられそうになってしまいました。あわれに思った村人たちはこの姫をかくまいました。村人はコノシロという魚を焼き、追っ手の者に姫の行方を尋ねられると、「姫は亡くなりました。」と答え姫の命を救いました。コノシロは焼くと人を火葬したときと同じようなにおいがしたそうです。村人に感謝した姫は、このコノシロにちなんで身代神社を祀ったと伝わっています。

おいてけ堀（身代神社の池）

地図 4-14

身代神社の池は、もともとは荒川の流路だったなごりの池なので、魚が多く釣りをすると非常によく釣れました。しかし、釣りを終えて魚を持ち帰ろうとすると、池のなかから「オイテケ、オイテケ」という声がしました。この声を聞いた者は恐ろしくなってしまい、だれもが魚を置いて帰りました。もし、魚を持ち帰って食べてしまうと、その人の家は落ちぶれてしまい村に居られなくなってしまうと言い伝えられていたので、誰もその魚を食べる人はいませんでした。

宮目姫の伝説（姫宮神社）

地図 4-29

むかし平安京の頃、桓武天皇の皇子・安世王に宮目姫という美しい姫がいました。

この姫が下総国に行こうとした旅の途中、武蔵国百間の里、紅葉ヶ岡という所にたどりつきました。山中の紅葉のながめがとても美しく、浜の砂と調和してその見事さは言葉につくせぬほどでした。あまりの美しさに目を奪われた姫は思わず馬を止め、景色に見とれておりました。

いったいどれほどの時がたったのでしょうか。景色に見とれていた姫は突然の激しい癪に襲われ、手当てのすべも無いままに息を引き取ってしまったのです。姫のなきがらはこの岡の西の辺りに埋められました。この頃には岡の近くに住む人もいたため、姫の墓に花などを手向ける人もいたそうです。後に慈覚大師が故郷の下野へ下るとき、この姫の話を耳にして、里人と共に祠を建て供養をし、姫宮明神と呼んだということです。